

1989

季刊 連句 第25号

平成元年六月一日発行



恋句は三句去り（南柏雑記 23）……………	1
えにし……………	国島十雨…………… 2
「鳶の羽も」の巻 鑑賞（IV）……………	東 明雅…………… 4
A・C・C実作歌仙二巻……………	文 東 明雅・秋元正江…………… 10

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第二十九回 猫蓑会…	14
第一部 正式俳諧興行 (一) 役割 (二) 次第	
二十韻……………	捌・文 杉江杉亭
第二部 二十韻九巻……………	捌 東 明雅・上月淳子・式田和子 副島久美子・豊田好敏・中田あかり 馬場彬風・原田千町・吉沢てるよ
歌膝……………	秋元 正江…………… 19
幸せと連句……………	中島 啓世…………… 20
一役員として……………	市野沢弘子…………… 21

「蓑虫」付勝練習二十韻……………	22
柏連句会 二十韻	捌 東 明雅・文 山田和久…………… 24
四宮連句会 二十韻	捌・文 坂本孝子…………… 25
返子連句会 二十韻 二巻	捌・文 本屋良子…………… 26
	捌 加藤道子・文 式田和子…………… 27
電通連句部 二十韻	捌 東 明雅・文 青木秀樹…………… 28
雁帛往来・連句会案内……………	29
新刊紹介・「電通連句」……………	21

恋句は三句去り

雅

南 柏 雜 記 23

「連句研究」八十一号には俳諧の式目に関するアンケートの回答が特集されている。今泉宇涯・窪田薫・高畑自遊・柴崎正寿郎の各氏及び、連句研究会（鹿の会）としての式目案というものも拝見出来、興味が深かった。

いずれも、それぞれの流派のやり方を発表されているが、それらは決して連句界全体を規制するものではないから、どんな事を述べられようが自由で、それに文句を付けようとは思わない。

しかし、気になることがないでもない。たとえば、今泉宇涯氏は、

恋句は五句去二一三ヶ所、一箇所二一五句です。

とされ、窪田薫氏は、

恋句は五句去二一三ヶ所、一箇所二一五句続きがよい
と言っておられる。

高畑自遊氏も、

恋句は五句去二、三ヶ所、一箇所二一五句続きで可

と、この三氏は全く同じ意見であり、表現もほぼ同じである。

私は「連句入門」（昭和五十三年刊）にも書いている通り「恋は三句去り、句数は二句から五句続く」という芭蕉以来の法式を守り、猫蓑会ではこれを実行している。「恋句五句去り」とは誰がいつ決めたのか。もし、三句去りが許されぬとなると、有名な芭蕉・越人の両吟「雁がねも」の巻（元禄三年）の名残表の三・四・五の一連、及び九・一〇・一一の一連はともに恋句である。これは恋句三句去りの最もよい例であると思うが、五句去りを主張される方々は、このところをどう説明されようというのであろうか。恋句は一卷の中で特に目立つものである。だから、三句去りよりも五句去り位にしておく方が無難であると考えられる気持は分からぬでもない。しかし、現に芭蕉は三句去りでやっており、現代の我々でも、時と場合によっては三句去りで恋句を出す可能性もないではない。それをわざわざ五句去りにして窮屈にするのはいかがであろうか。

これが各流派の内での式目で納まっている間は問題ではないが、たとえば連句協会などで式目を定める時、多数の意見だからと言って、誤ったものを制定しかねない。これが私は最も恐しいのである。早急なる連句協会による式目の制定に、はっきり反対の意を表明する次第である。

えにし

國島十雨

半歌仙 ちゝる虫の巻

ちゝる虫 浄瑠璃坂のくれかゝり

どびろくの香の誘ふ月の出

海羸廻し眼の青き子も交りゐて

画集繙く客去りし後

小刀の缺けて古びし旅硯

黠しづむツンドラの虹

白銀の麦の穂蔭のかくれんぼ

清姫の目が闇にパッチリ

連句師の娘の婿は異国人

ゆがみてドアの開かぬプレハブ

笛を吹く遠火事赤い空の下

金鳥玉兎に古ぶ外套

爺さまはノモンハンにて死にました

ゲリラとなりて七生報国

結体の仮名交り文隙廣く

腹の足しにはならぬ陽炎

聖母子の視線ひとしく花に向き

仔猫転がす糸巻の毬

昭和四十九年十月五日

於 東京・市ヶ谷 南方子亭

國島 十雨
東 明雅
真鍋 天魚
鈴木 三余
高鳥 南方子
石川 宏作
和田 としお
星野 石雀
杉内 徒司
お 子
雅 雀
お 雀
作 雀
余 雀
雨

市ヶ谷佐土原町一の高鳥南方子さんの邸は高級住宅地帯で裏が谷になっていた記憶だ。浄瑠璃坂なんて嬉しい名の坂があがってゆく時、太陽が沈もうとしていて、暮れ残る空が血のように美しく焼けていた。ちゝる虫が鳴いていた。

南方子さんは出版関係の方とか、明雅、徒司さんのほかは皆初対面の方ばかりだった。

食事をしながら、半歌仙をということになり、発句を求められた。固辞もならず、で、道すがらの一句を挨拶とした。明雅さんの脇の付けの通りにどびろくも出て来た。

それぞれ自己紹介、名刺交換をしたのだが天魚さん、石川宏作さんは作家、三余さんは大学教授、和田としおさんは新潮社勤務、石雀さんは俳句で名前は承知していた。私は田舎蕉門、美濃派、獅子吼編集者、石田波郷の弟子でした、と挨拶した記憶がある。

私がこの半歌仙に仲間入りが出来たのは、明雅、徒司さんのお誘いがあった、厚生年金会館の芭蕉忌だったかに参加した、前夜の、つまり歓迎の座をつかって載いたのであった。

この年昭和四十九年八月三日に明雅、徒司のお二人が岐阜大学教授の鈴木勝忠さんの斡旋で、岐阜へ来られた。それは伊勢流のお二人が、嘗って支麦の徒と言われた、美濃派の探訪の旅に来られたのが因縁であるということだ。

支考の獅子庵、歴代の鑑塔を御案内して、その夜青々園、私の宅にお来し載き、珍客に美濃派の現況をお話したのであった。歌仙を巻こう、と明雅さんに発句をお願いした。

歌仙 涼しき邸の巻

降りたちて涼し泉の噴く邸

ねてゐて小田の蛙きゝませ

民謡はみな五線譜に書きとめて

刈り揃へたる半白の髪

上弦の月に傾く糸瓜棚

手花火囲む帯長く垂れ

六波羅は市中の寺地藏盆

下略

以下は翌日、岐阜伊奈波神社参集殿で岐阜在住の連衆十名ほどをあつめて、満尾したのである。

さて、私の家で明雅さんの心をとらえたのは、泉噴く城の外濠と、私がお目につけた、伝来の旅硯である。この旅硯と全く同形の硯が信州で見つかり、或る夜電話がかかって来て、この市ヶ谷へ持参する約束をしていたのである。

南方子亭の座で、二人は旅硯を確かめたのである。明雅さんの硯は二廻ほど大きかった。ちゝろ虫の巻の中へ、南方子さんの付けとして、『旅硯』が出て来たのは打坐即刻の付けである。

市ヶ谷の夜は、近くのホテルで、明雅さんと枕を並べて語り明かした。

美濃派は余り人情の自他は言いませんか？

はい余り言いませんね、もつとも三十三世を追贈された足立吾柳宗匠の連句論に、少し出ていたが……俳諧連句は先ず坐れだ。と坐らされて、私など古老からは余り教えて

東 明雅

各務 於菟

杉内 徒司

鈴木 勝忠

伊藤 南川

沢田 廬月

國島 十雨

貰えなかった、職人が体で覚えたように……：事実はそうでしたが……とまあ、こんな話をしたのであった。

明雅、徒司の二人さんとの出会いが、東京の連句の皆さんとの交流になって行ったのである。

和田としお、山地春眠子さんなどは、私が親戚の結婚式に参列していたホテル迄迎えに来られて、披露宴を脱げ出して一杯やったこともあった。

よき友ばかりで一生忘れられない思い出である。何時か、明雅、徒司、式田、秋元さんをお誘いして神田、淡路町の親戚の「万代家」旅館に於て、一座したことがある。

ニコライの鐘も師走の旅籠町

冬の紅葉のまだ朱き庭

十雨 明雅

の二十韻は、明雅さんの二十韻の最初の巻である。旅館の古田悦子が宇田零雨さんの草茎に所属しているのを一枚加えて、「五雲を望む万代の春」と徒司さんが座敷の額から裁ち入れて締めくくられた、その夜は二十韻満尾の祝盃をあげたのであった。それが猫蓑会の看板連句になろうとは思っていなかった。

私の獅子吼は四月に第六〇〇号の記念特集号を出し、明雅さんから「連句と伝統」の一文を戴いた。それは私との出会いから今日の連句界に対する考え方に及んでいた。

このごろの様な似而非連句の流行に対しては、かなり手厳しい大胆な表現で、蕉風連句をなつかしく思う言葉が述べられていた。

貴、猫蓑会の連句の御発展を心から期待するものである。

「鳶の羽も」の巻 鑑賞(Ⅳ)

東明雅

9

はきごころよきめりやすの足袋

何事も無言の内はしづかなり

(雑・人情目)

去来

(現代語訳)めりやす足袋のはきごころのよいことよ。こうして何も言わず黙って暮らすと、世は静かで平穩なものである。

(付心)前句の人の観想の句(人生・世相その他に対する感慨を付ける)である。

(付味)前句のめりやすの軽くて快適な柔軟性が、この人物の物に逆わない気持、平穩・静和を愛する気持に通っている。

(転じ)この場合、大打越(打越の一つ前の句)・打越・前句と、三句ほぼ同じ句境が続いたので、去来としては、どうしても何か転じなくてはならなかった。しかし、打越・前句、ことに前句があまりはっきりした自の句であるために、他の句へ転ずることが難しかったのであろう。

前句に付ければ、前句の人の信条の独白めいたものにな

り、転じとして万全のものとはなり得ていないけれども、打越とくらべてみた場合には、打越の句の動に対して静、具象に対して抽象、風狂的な気分に対して自足安悦の気分と、相当に変化し、去来の苦勞の程は察せられる。

(補説)以下は、全く私の想像である。前句にメリヤスの足袋が出たのは、この一座で長崎の人である去来が、メリヤスの靴下を履いていたのではないか。それを目敏く見つけた凡兆が、「随分履き心地がよさそうですね」とひやかしたのに、去来が応じたのがこの句ではなかったか。一座囁目の事実を直ちに作品に取り上げるのは、俳諧(連句)功者の常用する一手段だからである。才氣煥発の凡兆に対し、むしろ重厚な去来が、せい一ぱいの努力で何とか答えよう、何とか転じようとした様子が偲ばれ、ほほえましいが、実際に証拠を上げよと言われると何も無い。だが、そこまで想像して句を味わうのも楽しいし、鑑賞ならば、そのようなことも許されると思う。

さらに、この句で打越から三句人情目の句が続いている。北枝(？一七一八)の「付方自他伝」によれば、人情自

も他も二句は続けられるが、三句続け、あるいは打越に自
または他が出ることは誠にしている。これは句境に転じがな
く、輪廻になる恐れがあるからである。もちろんこの「鶯
の羽も」の巻の連衆には自他の意識はあったと思われるが
まだその続け方にはっきりした規則はなく、「付方自他伝」
そのものが、この歌仙完成後二年たった元禄五年（一六九
二）に作られたものである。だから、たとえ、人情目がこ
のように三句続けられても、その三句の間でそれぞれ変化
し、転じていけばよいという考え方であったようだ。だか
ら、この一巻は、三句以上、人情目の続くところがこれか
らもあると思うが、その際は、同じ人情目の句の中で、ど
のように三句の転じが行なわれているか、その点を注意し
て欲しいと思う。

10

何事も無言の内はしづかなり

里見え初て午の貝ふく

(雑。人情他)

芭蕉

(現代語訳) 無言の行を終って下山する山伏たちは、里
が見えそめた時、昼を知らせる法螺貝を吹きならし賑かに
なった。

(付心) 前句の「無言の内は」を山伏たちが行なう「無
言の行」と見て、その山伏の吹く法螺貝の音を付けたもの
このような付け方を心付という。

(付味) 前句の静寂に対し、喧騒のコントラストである。

(転じ) 打越がひとり晏如と暮らしている感慨を述べて
いるのに対し、この句はいかにも元氣な山伏たちを登場さ
せ、気分を一転し、一巻に活気が漲って来た。

(補説) 「午の貝ふく」は午の刻の合図に法螺貝を吹く
のであるが、その吹く人を山伏ではなく村人が吹くのだと
いう説がある。伊藤正雄氏は「芭蕉連句全解」において、
修験者が時を報ずる貝を吹くというのは不自然であるとし、
「現在も大和三輪地方の農村では、午の貝を吹いて正午の
休憩時を知らせ、全村一斉に昼食後、暫く午睡をとり、二
時に再び貝を吹いて、午後の農作業に入る習慣がある」と
紹介しておられる。しかし、この付合が、前句の静に対す
る付句の騒のコントラストに興味があるとすれば、村
里の時報と見るより、修験者(山伏)の吹く貝と見た方が、
よりその対照ははっきりし、効果的であろう。

村里で貝を鳴らすのがすぐ騒がしいとは考えられない。
それよりも山伏たちが里が見えそめたのをきっかけに、休
憩・昼食の合図として法螺貝を吹き、同時に無言の行も解
いたとするならば、その方がより活気に溢れ、おもしろい
と思われるからである。

山伏が時を知らず貝を吹くのはおかしいというけれども、
当時の時報は大ざっぱなものであり、太鼓・鐘・法螺貝と
いろいろの道具を使って知らせたのである。前句を山伏と
見る限り、法螺貝は山伏と付合語の一つとなっているから、
やはり山伏がこの貝を吹いていると見るべきであろう。

この句によって、一巻の気分が見事に転じられた。芭蕉

は前句の作者去來が果し得なかつた一卷の気分轉換を鮮かにしたとともに、事柄を山伏の行法のみに限らず、「里見え初て」というように世界をひろく、庶民の相へ転じたことによつて、次の作者が作りやすいように配慮している。まことに一座を捌く者としての力量の大きさに感嘆せざるを得ない。

11

里見え初て午の貝ふく

はつれたる去年のねござのしたゝるく

凡兆

(雑。人情無)

(現代語訳) 山路から里の見える所までくると、昼を知らせる貝の音が聞こえる。その辺の家で休ませてもらったが、糸のほつれかかった寝蓆は昨年からのものか、いやに汚れてしめっぽかった。

(付心) 其場の付。

(付味) 前句の里と、付句のねござはよく位が合っている。逆に言えば、前句の里から付句の位が導き出されたもので、これを見ても、前句を作った芭蕉の力は偉大である。(転じ) まいら戸の句から、めりやすの足袋をへて、何事もの句まで続いていた気分が甚だ庶民的な気分に一転されている。

(補説) ねござは寝蓆で、寝蓆と同意。今日は夏の季語になっているが、元禄のころは、夏だけでなく、一年中、庶民の敷蒲団用として用いられた。「物のせはしき世渡り

の中にも、夫婦の語らひを楽しみ、南枕に寝蓆しどけなくなりしは、過ぎつる夜、甲子をもかまはず、何事をかし侍る」(「好色五人女」巻二)

したゝるくは湿気をふくんでじめじめしているさまをいうが、仮名草子「犬枕」に「したたるきもの」に「相惚れの目元」。「露によれたるきる物」をあげてある通り、べたべたと色気たつぶりの形容にもなる。

而して、この寝蓆はどこにあつたものか、また誰が用いたものかについて、①雨か霧の晴れ間に干した様 ②旅人が雨具として借りたもの ③道の小家のもので旅人が腰をかけたもの ④貧しい村人が昼寝に用いるもの ⑤山伏に跨いでもらう為に道に敷いてあるもの、の大体五つの説があるが、村里の寝蓆の汚れてじめじめしているのを強く感じるのは、その村人でなくて、やはり旅人であろうし、その旅人も山伏に関係したものと見ると、三句がらみになるので、普通の行客と見たい。やはり、曲齊が「七部婆心録」に言うように「コハ都人ならむ。午の貝がなれば昼飯せむと、とある家の椽かるに、里人の真心に、旅客を会釈し、そこは埃にあえたれば、暫待給へと、寝蓆一枚持出るを見るに、煮染のごとく色付たれば、イヤお構下されなと断れども、強て敷けば、せひなく尻浮て腰掛ながら、したゝるく思ふ様也」と見るのが一番妥当であろう。

寝蓆。したゝるく、ともに何か次に恋句を誘う気分が感じられる。峯入行者が大和洞川辺で精進落しをする話、「好色一代男」巻二ノ七参照)も思いあわせられ、昼下り

の情事ではないけれども、すくなくとも凡兆はここで「恋の呼び出し」をしていることは十分に考えられるところである。

12

ほつれたる去年のねござのしたゝるく

芙蓉のはなのほらくとちる

史邦

(夏。芙蓉のはな。人情無)

(現代語訳) 去年から使い古しの寝蓆は汚れ、糸がはつれている。その上で寝ていると、折から屋外の蓮の花がはらはらと散る。

(付心) 遁句的な其場の付け。

(付味) 移り。「古び萎えた湿っぽい寝蓆の、破れほつれた前句の家の内なる気趣を、蓮花の崩れ散る家の外の趣に軽く承けたのである。それと共に、前句に表象せられる佻しい汚さに対して、生彩を与へ美化したものであるので、『俳諧古集之弁』に『淨穢のとり合せいとおかし』と見てゐるのもその意であらう。このやうに前句の表象に暗示する気趣を付句の表象に移動させ、その感じの交融する処に付運びの重心を置く付肌が『うつり』の名目で呼ばれて居る。『うつり』は移りであると共に、又二句の情趣の照応をいふ映りの義でもある」と天野雨山は「猿蓑連句評釈」に説明している。付肌とは付味と同意である。(転じ) この句は純叙景の句であり、水辺の蓮の花の美しさを描いている。その点、打越の人臭い景からは全く別

の世界を描き出して、気分も転じている。

(補説) 「俳諧初学抄」などでは芙蓉の花を初秋の季語

としているが、これは木芙蓉のことで、これははらはらとは散らない。中国では芙蓉は蓮の花であり、蓮の花は同じ

「俳諧初学抄」では未夏の季語としている。この句も前後に秋の季語がないところを見ると、夏の蓮をさしていることは明かである。

芙蓉花は「長恨歌」にも「太液芙蓉未央柳、芙蓉如面柳似眉」とあるように、芙蓉姿・芙蓉面・芙蓉之降などみな古来美人の喩として用いられ、なまめかしいところがある。

私は前句のねござ・したゝるしなど、この付句の芙蓉の付合に、軽い色気を感じる。それが移りであると思う。

凡兆は前句ではっきり恋句を誘っている。しかし、史邦はそれに真正面から応じないで軽くいなした形になっている、これが遁句の特徴である。この巻の前半に恋句が見られないのはやや寂しいが、それは史邦の責任である。

13

芙蓉のはなのほらくとちる

吸物は先出来されしすいせんじ

芭蕉

(雑。人情自他半)

(現代語訳) 池畔の小亭ではらはらと散る蓮を見ながらの宴、出された吸物の水前寺海苔の淡白な味を、客は満足して、まず第一の亭主のお手柄と賞美する。

(付心) 起情(前句の人情無の句に応じた人情の句を付

ける。この場合は、主客がいるわけであるから、人情自他半である。

(付味) はらはらと散る蓮の、気高く清い風致は水前寺海苔の高雅、淡白な味と匂いあっている。匂いの付であり位の付でもある。

(転じ) 打越の汚れ湿った寢真座の句から、全く清浄無垢の世界と、大きな転じが見られる。

(補説) 吸物とは、酒の肴さかなとしてのつゆものを指し、御飯とともに飲む時は「汁」と言って吸物とは言わない。有名な元禄七年八月十五夜の芭蕉無名庵の献立表を見ると吸物は二回出ており、まず酒盛の初めに「つかみたうふ」の吸物、そして最後に御飯を出す前にも「松茸」の吸物が出ている。これによると当時の客振舞には二度吸物を出し、酒をすすめていることが分る。「先出来されし……」は、これからどんな珍らしいものが出てくるかと期待させるに十分なものが、宴の最初に出て来たことを賞美した意である。

すいぜんじとは水前寺海苔。熊本市出水町にある水前寺公園は、江戸時代、藩主細川家の別業成趣園の跡で、昔はここで藍藻類の淡水藻が取れ、水前寺海苔として、淡白な風味が賞美され、精進料理の高級食品として有名であった。この水前寺海苔は、寺院・あるいは茶会などを連想させ、芭蕉はこの句によって、打越・前句にもやもやしていた一種のなまめかしい気分を払拭してしまった。

14

吸物は先出来されしすいぜんじ

三里あまりの道かゝえける

(雑。人情自)

去来

(現代語訳) この水前寺海苔のお吸物は本当に結構でした。私はこれから三里の道のりがありますので、これとて辞去しようとする。

(付心) 向付。前句の立派な亭主ぶりに対し、立派な客の挨拶ぶりを付けたもの。前句の人物に対して、付句で別の人物を出して付けるのを向付という。

(付味) 軽い句の応酬であるが、亭主のもてなしぶりの鮮かさに対して、酒を切り上げる客の挨拶の鮮かさ、これは移りである。

(転じ) 打越の芙蓉の花の清純さに対し、この句は雅から俗への変化が見られる。

(補説) 「三里あまりの道かゝえける」という言葉が、どうして「酒をきり上げる」よい口実となり、鮮かな客の挨拶となるのか。それには、「三里ばかり」という語が、当時の人たちに、どのようなイメージを与えたかを考えなければならぬ。一般的に言って、当時の人たちは歩くことに馴れていた。馬や駕籠の外にはこれといった乗物はなく、馬や駕籠でさえも、多くの庶民は常に利用できるとは限らなかった。この点、ちょっとした所にも車を利用し、歩くということが全くなかった現代人の意識とは異なる。

酒機嫌旅の板屋も一里程(元禄五年「月代を」の巻)

壹里や貳里の路は朝の間（元禄七年「水鶏なくと」の巻）

というような句もあって、一里や二里ならば全く問題にならない短い距離と考えられていた。だから、逆に言えば一里または二里では酒を切り上げる理由にはならないのである。

そして、これが三里となれば、やや、状況が変わって来る。

福井は三里計なれば、夕飯したためて出るにたそがれの路たどくし（「おくのほそ道」）

とあるように、客が「これから三里行かねばならない」と言ったら、主人はもう無理には引きとめられないけれども、さして心配になる程の距離ではなかったのである。それが、吸物を出した主人の心遣いに対する客の心遣いなのである。

この句の解釈、旧注にはあるいは客が急ぐ意に取り、気ぜわしい気分とし、極端なものは「隙とりてめいわくなるの意に転ず、先の字をとがめていへり」（「俳諧古集之弁」）などと解するものもあるが、そのような気分には解釈しては

付味がおもしろくない。

さきに打越の句と付いた時の吸物は例の芭蕉の献立に見る第一の吸物（つかみだうふ）にあたるところと言ったがこの付句では二番目の吸物（松茸の箇所にあたる）に、見立替えをしている。

二番目の吸物が出ると、宴もそろそろ終りに近づくとしては適当な機をとらえて酒を打ちきるように才覚しなければならぬ。

この付句は、そのために最も適切な理由を述べたまでであり、別に急いでいるわけでも気忙しい気分も本当にはないのである。

「先」という語も、ここでは単なる感動詞的に用い、「これはこれは」とか、「本当に」とかの意に、これも見立替えられている。

かゝえけるは、余情を残した表現であろうが、「はらくとちる」と、留めが「る」の字の打越になっている。これは今日の実作なら嫌われるところであろうが、当時としては許されたものか。かと言って、「けり」では強すぎるのである。

武翁賞作品募集

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、九月十日（日）までに一卷につき三部ずつ呈出されたい。応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

初講座 秋元正江捌

連句講座実作 東明雅

芽おこしの雨にけぶるや初講座

チヨークの音のひびく春陰

拾ひ来し小鳥の卵手の中に

縄跳びの子のふたり飛入り

贅文様薄るる宵の月

おみやげに持つ舞茸の籠

ロザリオ祭ぬかづくうなじ深々と

その罪問はば仄と紅

おととと君は誰にも渡さない

ごきぶり人形叩く快感

逆輸入アメリカ産の国産車

レミーマルタンまたも乾杯

月涼し門限の堀よぢのぼる

朝顔ひとつからむ箱庭

相統に俄か養子のぞろり殖え

羅漢そっくり友の微笑み

埋没のダムのはとりの花大樹

海上遥か昼気楼たち

久美子

濱

雅代

啓世

和子

あかり

元子

千町

清子

利子

麻子

光子

美灯子

同

淳子

正江

千雪

杉亭

朝日カルチャーセンター(A・C・C)の連句講座(実作と理論)は、昭和五十六年四月に開設されたから、今年はもう八年目に入った。昨年度からは私の外に、主として実作の指導者として秋元正江さんを迎え、いよいよ内容が充実して来た。

上に掲げた歌仙二卷、「初講座」の卷・「秋しぐれ」の卷は、この教室で秋元さんが指導し首尾されたものである。教室で連句を作ることには、大へん難しいことである。たとえば普通の俳席にくらべて、まず連衆というか受講生の数が圧倒的に多いことである。普通の俳席で歌仙の場合は六・七人が最適で、十人以上になるとちよつと扱いに困る。それが教室では二十数人であるから、取扱いが面倒なのは自明の理であろう。一巡(一度句を採用された人は、全部が採用され終るまで、再採用されることを遠慮する)のルールがあるから、二十数名が一巡するまでは滅多なことでは採用されない。これが捌け者に取っても、捌かれる者に取っても一つのネックである。

次に時間の問題である。一句を治定する為には、各人に句を小短冊に書いて貰って提出させ、その句を黒板に書き

眠りたるままの仔猫を預りぬ

うちの婆さん食が細くて

ちんどん屋安売チラシ配る街

懐手して波郷忌の午後

寒病棟妻に触れずて久しかり

燃えあがる恋うつつなりしや

ひと型になり魚になる流れ雲

シャボンのマーク尖る三日月

部屋の間やと捕へしかまどうま

ことしも無事に生見玉終へ

曲れない潜水艦に御用心

私立文系数Ⅲはなし

現代はおもちゃとなりしコンピュター

馬刺が好きで阿蘇に住みつく

孫の名もすっかり忘る大世帯

色紙に箔の霞たなびく

花びらのふりかかりある休み窯

旅ゆくわれに鳴きたてる雉

昭和六十三年四月十三日 起首

昭和六十三年九月十四日 首尾

於 A・C・C 連句教室

淑子 澄子 好敏 房利 達子 一恵 和代 よしえ 亭澄 弥生 弘子 徒司 弘利 明雅

うつし、番号を記す。そして、最初は自分がよいと思ったものに自由な挙手させて、その数をしぼり、さらに、今度は自分がよいと思うもの一句にだけ挙手させて、その数を考えて決定されるようであるが、これはやはりどうスピーディにやっても、三十分以上はかかるのである。これも普通の俳諧の座なら、出された小短冊を捌きが眺め、連衆には相談なく即決するのにくらべると、うんと苦勞である。

そして、残った句は宿題として、ハガキで投句させ、それを全部あつめて清書して、次の回の教室で皆にコピーを配って、意見を聞いて治定する。しかし、これもすんなりと決まらないことも度々で、仲々煩わしい仕事であった。

私は一昨年までは必死に頑張ってきたが、だんだん年も取るし、毫碌して来たのでその任に堪えられなくなり、昨年度から肩代りしていただいて、本当に楽になり有難いと思つている。

そのかわり、引きうけられた秋元さんは嘸かし御苦勞様であろうと御推察申し上げている。

そのようないろいろ難しい条件を克服して、めでたく、歌仙を昨年度は二巻までも首尾されたのは御同慶の至りであるとともに、指導された秋元さんならびに教室全員の御努力に対して、心から敬意を払うものである。

今後も一致協力して、益々よい作品を産み出されるよう念願する次第である。

秋しぐれ

秋元正江 捌

「秋しぐれ」鑑賞

秋しぐれ駅に角川文庫買ふ

ことしまだ見ぬ十月の月

両の手を合はせ鳩吹く獵師ゐて

雑種ながらも耳立てる犬

バザー用サロン前掛縫うてをり

炬燵囲みし子等のなぞなぞ

雪下しすみたる屋根の黒々と

紅さし指にぼつちりと棘

AとB恋の秤のさだまらず

アシユレの他は振りむかぬ女

貸しビデオ値引き合戦たけなはに

捕へし蝮壘に漬けこむ

仰ぎみて馬籠奈良井の夏の月

字の薄れたる万葉の歌碑

代議士は名刺ひとときは大きくし

ラジコン飛行機自由自在よ

鉄鉢に御喜捨の米と花びらと

杭にかたまる蜷二つ三つ

利子

澄子

杉亭

雅代

千町

淑子

あかり

和子

正江

よしえ

代

徒司

清子

久美子

好敏

渚

淳子

濱

「山上宗二記」に、茶ノ建前ハ無言。次ニ亭主振りノ事、心ニ成程客人ヲ敬スベシ。貴人ノ茶湯上手ノ事ハ云フニ及バズ、常ノ参会スル人ヲモ、心ノ底ニハ名人ノ如クニ思フベシ。

とあります。一巻の鑑賞は読者にまかせて捌きは無言でいたいのですが、茶事の客が帰った後、心しずかに自服の茶を点て庭を眺める気分で、巻き終った「秋しぐれ」の余韻と過ぎにし日の緊張と興奮をふり返ってみました。

明雅先生の連句鑑賞規準を胸に、

一、一句一句のおもしろさ。

二、前句と付句との間に生まれる付味のおもしろさ。

三、三句目の転じのおもしろさ。

四、一巻全体の議成とその変化、調和のおもしろさ。

(一) 変化がなめらかに無理なく行われているか。

(二) 現代社会をえがいて偏らず描写に新味、面白味があるか。

(三) をかし(滑稽)、しをり(哀憐)があるか。

を考えてみました。

秋しぐれ駅に角川文庫買ふ

利子

孕鹿やはらかき土歩むなり

質屋を知らぬいまの学生

廃兵の縁のほつれし巻脚絆

おっとどっこいこの線のうち

湯豆腐にいつしか笑みのしどけなく

離婚結婚たしか四五回

鈍感の雑魚ばかり釣るこの辺り

台湾へとぶ話煮つまる

短銃を入れたる鞆月を浴び

鯛の鳴く脊戸のうら山

今は亡きはらからと酌む温め酒

無位無冠なり前衛の書家

はたはたと平成の絵馬風に揺れ

返した傘をまた借りてゆく

診察券どこへ忘れて来たのやら

理髪屋のどかすべるバリカン

篝守灯しそめたる花の下

縄で作りし低きぶらんこ

昭和六十三年十月十二日 起首
平成元年三月八日 首尾
於 A・C・C 連句教室

弘 弥 明 志 達 千 啓 一 元
子 江 生 雅 げ 子 雪 恵 り 世 恵 澄 子 和 司 敏 淳

ことしまだ見ぬ十月の月

澄子

発句は、さりげない駅風景に、文庫本を買うという心の弾みが、秋の講座はじめの教室全員の気持をよく表わしていました。

脇は、秋しぐれの発句に趣向を凝らした月が沢山でましたが、この巻の年の気象の記録にもなり、「梅が香」の巻の芭蕉の句を思わせました。

貸しビデオ値引き合戦たけなはに

雅代

捕へし蝮壘に潰けこむ

徒司

仰ぎみて馬籠奈良井の夏の月

清子

質屋を知らぬいまの学生

好敏

廃兵の縁のほつれし巻脚絆

徒司

おっとどっこいこの線のうち

和子

はたはたと平成の絵馬風に揺れ

久美子

返した傘をまた借りてゆく

志げ子

診察券どこへ忘れて来たのやら

明雅

転じ、をかし、しをり、を味わってみて下さい。捌きとして、常に参会する人をも心の底に名人の如く、教室の連衆をもてなすことができたかと、例年より早かった花が散って藤に移るこの頃、またこの一巻を眺めております。

(正江)

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第二十九回 猫蓑会

第二十九回猫蓑会は四月二十五日（火）、江東区亀戸天神社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興

行、奉納し、そのあと、二十韻九巻を首尾した。

第一部 正式俳諧興行 「梅の核」一巻

第二部 二十韻九巻

(一) 役割

老長	配硯	花司	座配	座見	副知司	副知司	知司	執筆	副宗匠	脇宗匠	宗匠
東	金久保	滝川	雑賀	矢島	市野沢	式田	福井	秋元	中島	中川	杉江
明雅	淑子	雅代	遊	房利	弘子	和子	隆秀	正江	啓世	哲	杉亭

(二) 次第

- 一 席改め (知司の指図により座見・座配の役)
- 二 席入り (知司・座配)
- 三 配硯 (重ね硯を配る)
- 四 献花 (花司)
- 五 執筆登場 (執筆)
- 六 文台捌 (執筆)
- 七 知司挨拶 (知司)
- 八 俳諧興行 (執筆・連衆)
- 九 花前 (執筆)
- 一〇 玉串奉献 (宗匠)
- 一一 花の句 (宗匠)
- 一二 端作り (執筆)
- 一三 吟声 (執筆)
- 一四 文台返し (執筆)
- 一五 作品奉納 (執筆)
- 一六 挨拶 (知司)
- 一七 退席

二十韻 梅の核

新地にもかくなるものか梅の核

祭の今日の賑かな宮

黒白の碁石を崩す音のして

くゆらすパイプけむり一条

旅の月男同志の荷の軽き

京大文字誘ふ相席

漸寒の水茎の跡うるはしく

せいっぱいにのびをする猫

カリーにはガラムマサラを煮込むらん

展望台で騒ぐ子供ら

黙礼の人に覚えはなかりけり

韃うなりて旋盤に酒

いざようて凍りし月は湖に

雀鬼を追ひて雪女郎となり

世に妻にはじき出されて山頭火

電子ノートに消えしアドレス

本陣に残りしものは井戸と堀

胡蝶となりて夢の広野に

白寿翁健筆揮ふ花の陰

外国客船春の棧橋

註 梅翁は談林俳諧の祖西山宗因（一六〇五〜一六八二）。句は寛文三年（一六六三）亀戸天満宮が現在の地へ

宮建された時の吟である。

藤祭り正式俳諧に参加して

杉 江 杉 亭

昨日の雨が嘘のように晴れ上がり、亀戸天神は藤日和。

藤浪を見上げる人、朱の太鼓橋を渡る人、撫牛を撫でる人、

この中を通り抜けて社務所に到着したのが十一時前でした。

今年で三回目を迎えた猫蓑会の藤祭り奉納正式俳諧の特色は執筆に女性が選ばれたこと。そして明雅先生が宗匠から

老長役に廻られ、小生が宗匠役の大任を仰せ付かったことでした。

十二時三十分役員一同神前でお祓いを受け十三時から正式俳諧の張行となりました。今回の発句は神社側からのご要望もあって梅翁の句を頂きました。明雅先生のお話によりますと梅翁は談林俳諧の祖西山宗因の別号でこの句は寛文三年（一六六三）亀戸天満宮が現在の地へ宮建された時の吟とのこと。この亀戸天神にゆかりのある句を立句に今日の藤祭りに相応しい明雅先生の脇を頂戴しました。

藤をあしらった着物に紫の袴を付けた秋元さんの執筆姿は今日の藤祭り張行を一層引き立てました。「左澤」の文台を前にしての文台捌き、歌膝に構えての吟声も申し分なく、連衆、参列者一同感銘を深くし、「サンマは目黒、執筆は女性」の声が耳元をかすめたのは空耳だったでしょう

か。土牛の面影付の花に港の風景の挙句を得て無事満尾して奉納し、どうか宗匠役の大任を果すことが出来ました。

役員始め連衆の皆様お力添え有難うございました。

藤のひと房

東 明雅 捌

俳諧の藤のひと房さしかざし

胡蝶したがへ絵日傘の人

春惜しむピアノの会に連れ立ちて

トロピカルとは味な飲物

浦安の駅まあたらし月昇る

闇魔参りの宵の逢引

肌寒し肌寒しとて甘えつつ

ちりめん座蒲団猫のちんまり

クラブ振り明日のスコア夢に見る

總理SP同じ背格好

炎昼に走り抜け去る救急車

辣菲の臭ひ溢れゐる土間

迷路めくここはマカオの私娼窟

年は十五か絹のスキヤンティ

大根はつるされ干され月の下

凍てし池底鯉の動かず

白寿なる翁白磁の盃乾して

けふは快晴一期一会と

天守閣隠すばかりに花吹雪

かげろふもゆる袴紫

藤 祭 り

上月淳子 捌

藤祭り江戸の名残の囃かな

鶯の小鈴の嘴の紅色

針運ぶ玻璃戸の外は昏れかねて

TV料理のメモとりそこね

大吟醸月にかかげて主どの

鳴子鳴らして直次郎来る

肩抱きて蓮の実飛ぶを見てゐたり

ごろごろにゃあと野良の四五匹

チャイハナの道にむかひて囁るお茶

オパタリアンのモンストラを穿く

遊園地隣近所を誘ひあひ

なじみの医者に暑中御見舞

月させる藍甕の藍つぶやける

電話に指かけそつと引込め

付け睫偽の涙を宿らせて

総理の椅子ももうこれまでよ

ぬるき風呂湯ざめこはく出て出られない

オープン戦はもう直ぐなのに

九重の常照皇寺花枝垂れ

烏帽子傾け曲水の宴

唐 破 風

式田和子 捌

唐破風の御社藤に湧きにけり

池を巡りて人と春塵

墨磨れば臙の月に紙浮きて

子等賑やかに遊ぶおほじき

ギヤマンの皿に白玉不揃ひに

蚊柱くづる祇園裏町

口説かれていつもこりずにのせられる

うっかり『はい』といつてしまった

アルミ貨がこれほど重い元年度

弁当の鱈諾威の産

大空にしまふくろふの舞ひ仰ぐ

ゴルフ用具を托す宅配

土砂加持で生計を樹つる陀羅尼宗

旅の馴染みと温め酒酌む

黙のまま行きつ戻りつ月の道

ひよんな処についたためなもみ

生ひ立ち記治虫の漫画しみじみと

白い杖にも犬のまつはる

新名所若木の花は二分三分

桜ゆさぶる肥後のもつこす

郁子

和子

龍肝

正敬

ふみ

敬

み

和

肝

郁

同

み

肝

郁

み

敬

郁

み

敬

肝

藤 祭り

副島久美子 捌

文台の捌きあざやか藤祭り
 翅音を軽くめぐる姫虻
 陽炎の中の一人となりてゐて
 コツフェル出して沸かすコーヒー
 若作りアロハシャツ着て色眼鏡
 又瘦せたねと肩を抱かるる
 軽石の擦り減つてゐる雪の宿
 冬濤洗ふ磯照らす月
 仕手株に三日大尽生れたる
 ソファーによりて紫煙くゆらす
 幻の卑弥呼の里か吉野ヶ里
 土をせせりてさわぐ雀ら
 もてすぎる色浅黒き美少年
 何でもないとあの娘あざむき
 月の出の夜々に遅るるひそけさよ
 新酒にうるか宅急便にて
 来し方と行く末思ふそぞろ寒
 「古今和歌集」ひさびさに読む
 巡礼の花の下より現はるる
 猫が横切る春泥の道

久美子

清子

房利

よしえ

房利

清

同

え

清

え

清

利

美

清

利

え

同

利

清

藤 の 浪

豊田好敏 捌

下町のかほり運ぶや藤の浪
 せんべい返す手振永き日
 メーデーの列に幼児加はりて
 居間のテレビは音だけを聞く
 基会所の二階に巢食ふ天狗連
 噴水池に映る薄月
 逢引は又待たされて枇杷の影
 持てるお医者ちよつと藪なり
 次々と巳年の赤子生れてる
 お祝ひ金にさしむ家計簿
 九月蚊帳バンガローには虫多し
 せせらぎの辺に鶺鴒の声
 望くだり別れの予感抱きしめる
 ワイングラスに葉一粒
 讚美歌の五百十番開かれて
 生きた化石のやうな顔つき
 わが国のサッカーファン紳士なり
 観光バスのバックオーライ
 弘前の城趾公園花万朵
 春野遊びの嬭達ゆく

好敏

麻子

美智子

弥生

敏

生

麻

智

敏

生

麻

智

生

麻

敏

智

麻

敏

生

白 藤

中田あかり 捌

白藤の房の短かき水面かな
 押されて渡る柔東風の橋
 燕の巣子等は爪立ち仰ぐらむ
 郵便配達あける裏木戸
 のみさしのレミーマルタン夏の月
 蛇の恋淡きままなる
 からませし小指と小指物を言ひ
 一時間ほど来ない汽車待つ
 辞任表明きいてころりと同情し
 ドクターストップ煙草さよなら
 雲ひくく冬濤よする牧師館
 徹夜原稿氷下魚囓みつつ
 牛生まる根釧原野人往き来
 やつともらった南国の嫁
 二日月あのテクニク忘れ兼ね
 ルーベでのぞく蟻螂の翅
 烏瓜ぶらりとさがる閻魔堂
 電子音楽突如とまりぬ
 出稼ぎの父から届く花便り
 菜飯ほかほか皿に盛りつけ

あかり

利子

雅代

哲

達子

哲

代

哲

利

達

同

哲

利

代

哲

利

代

利

達

藤まつり

馬場彬風 捌

撫牛

原田千町 捌

藤垂るる

吉澤てるよ 捌

亀戸や天満宮の藤まつり

春の大前ささぐ俳諧

遠足の子等が手を振る車窓にて

煙草くゆらし石に腰かけ

金魚鉢月の光に輝きぬ

浴衣に着替へ睦ぶ嬉しさ

あなたの名何時になつたら名のれるの

海外出張つひに三年

東京はインテリゼントのビルばかり

ふるさと創生社の説法

竹藪に筍ならぬ金を掘り

狸ばかりが増える世の中

ほろ酔の父帰りくるしはぶきよ

トイレに彼をかかす早わざ

嬉曳は素知らぬ顔の月ながめ

そつと出されしままかりの鮎

収穫の空にこだます鳥をどし

ジョギングシューズ竿に干さるる

切り通しぬけて万葉の花盛り

弥生の山を画く人々

彬風
みづゑ

弘子

一恵

同

同

風

ゑ

子

ゑ

風

ゑ

恵

子

風

同

ゑ

子

恵

子

撫牛の座る神苑藤香る

朱の反り橋生まれつぐ蛸蚪

おもたせの三寶柑を大皿に

ジグソーパズル興ず子供等

蓼科のサマーハウスを照らす月

籠枕して添寝する仲

恋の沙汰みそかごとこそ極みとや

文庫本にて探す西行

消費税面倒臭くややくしく

次回五輪はバルセロナなり

爛酒を廻す友垣法螺談義

戦のことは夢のまた夢

けふも又鉢の僧駅頭に

ありと思へぬ蓑虫の愛

幻月の掛かる木の間にペーゼして

芸術祭に田園を指揮

魚の目のだんだん育ち足をひく

老の水仕のままごとに似る

花びらの權持つ人に降りかか

雲雀舞ひ立つひながしの空

千町

啓世

杉亭

淑子

道子

亭

世

淑

町

淑

亭

世

淑

道

世

同

道

町

亭

藤房の垂るる池の面幽かなり

亀甲羅干すかぎろひの石

大掃除時わかずして終るらん

こんべい糖を舌にころばせ

白き帆を操る人に月涼し

無理して贈るシャネルの五番

君だけは裏切れないと耳元に

疑惑の議員すぐに入院

由緒ある老舗は消えてビルの街

ピアノの上に眠る三毛猫

独吟の連句名残りに移りたる

午後の予定は峡の探梅

童神の激しき恋は凍滝に

志功の彫りし女菩薩の胸

月夜良し酒も味佳し紅葉よし

落鮎を焼く粗朶を集めて

文化祭昔の友と村芝居

ホームの空岳拾ふ駅長

満開に咲けばこれより花の家

春の灯ともす奥の書院に

てるよ
光子

徒司

昌子

澄子

光

昌

澄

司

光

昌

司

昌

光

昌

澄

同

光

司

昌

歌 膝

秋元正江

歌膝とは、正式俳諧興行で執筆が右手に墨をふくませた筆を持ち、左膝を立てその上に懐紙をのせて句待ちの態をとることで

す。
黒紋付に仙台平の羽織袴を召された殿方ぶりはきまっています、袴の衣擦の音も凜凜しく、宗匠の「執筆、執筆」という声に、肩からすべらせて脱ぐ羽織、それを傍らで畳む座配と、どれをとっても歳月かけて、運びぬかれた格式ある服装だということがわかります。

現代の知る限りでは、初めての女の人の執筆ということで悩みましたのは歌膝をする袴のことでした。

秋雨に濡れながら新橋の「わんや」を訪ねた日から、市川の能衣裳の袴屋、浅草橋の呉服屋、浅草伝法院並びの時代衣裳屋と袴を尋ねて廻りましたが、卒業式シーズンを迎えて街で会う袴姿が目についてなかなかききまらなかった。

漸く四月のはじめ、赤味がかった紫色の女袴を探し、着物は藤色と白の江戸小紋に霞文様縫紋の襲ときめたときは、本当にはっとして家の掃除にもせいが出ました。

奥様にお教え頂いた文台袖は、右袖を内側に袂の丸みのところを、袖口の二センチ位下から、三角に折って留めつけます。これは右袖が硯などで汚れないようにというところからきた形でした。

几帳のある亀戸天神社の更衣室で、はじめて紫の袴を和子さんに結んで頂き、姿見の前にたちますと、どうやら執筆になれそうでしたが、受付に見学に見えられた懐かしい顔や、雑用之首をつっこむとすぐに、もとの木阿弥になってしまふのです。

神前でお祓いをうけるので、指先につめたい水をかけて手と口を清めておりますうち、今日の私の生きている心を執筆に托すことができたらと、祈るきもちでした。

正式俳諧の会場の緊張した空間の間と間をつなぐものが、宗匠、老長をはじめ、各役どころの作法だと思えます。

重ね硯を配る配硯の身のこなし、花司の牡丹の枝に鉄を入れる音、ハブニングは神社のご用で神官の玉串が間に合うかと、一

瞬はらはらしましたところへ、丁度間に合って白馬の王子様のように思えた神官田中様でした。

越天楽の奏楽がながれ、文台捌きから俳諧興行と付句は「花前」となり、神官は玉串をもって宗匠の前に進み出ました。宗匠はそれを神前に供えて二拍手をひびかせられました。

天神様の境内の今を盛りの藤の花は、池の面に匂いを漂わせ、古式床しい俳諧のセレモニーの中で、静謐なときをわかちあったのです。

真行草の礼も、扇を前に置いて天神様に再拝、宗匠以下には行の礼と、明雅先生と奥様にご指導を仰ぎましたが、その心をなぞることができたかと思いつくことが多いのです。

なにごとくも天神様が終る迄はを胸に刻み、亀戸に近いということで四月十五日の梅若忌に、東武浅草線の鐘ヶ淵から木母寺まで歩き、鞘堂の梅若塚と橋場の梅若の母の塚にお詣りをしてきました。やはり着着かなかったのです。文台は讓介氏作「左沢」硯箱、文鎮その他は明雅先生ご所持のものを使わせて頂きました。

幸せと連句

中島啓世

昭和五年頃、旧制高校生の兄から教えられた万葉集の中に、大伴家持の越中国守時代の歌があり、女学生だった私は愛誦しておりました。

藤浪の影なす海の底清み

沈着石をも珠とわが見る

天平勝宝二年（七五〇年）四月十二日のこと、越路での四年目の晩春、翌年には越中を去るであろう感慨をこめて、詠んだものと思われます。高岡から山裾を氷見に向う街道から、藤浪神社の方へゆくあたり、布勢の海水の周辺一帯に山藤が白に紫に咲きほこっていたことでしょう。

東京で一番、藤の美しいところは、何と申しまでも亀戸の天神様、ここ三年ほど、その盛りの頃に、猫藁会の正式俳諧を奉納させていただいており、本当に光栄なことと喜んでおります。

この度は、勿体ないことに、副宗匠という身にあまる、重いお役を頂戴いたしました。謹んでお受けいたしますと共に、今生の最高の思い出とさせていただきます。

三十年ほど前から俳句を山口誓子先生に、芭蕉や蕪村の連句等を、岡田利兵衛、中村俊定先生からずっとお教えをうけておりましたが私の今の幸せは、十二年ほど前、明雅先生に師事させていただいてからのこと、とりわけ、朝日カルチャアに、連句教室が発足してからの八年ほど。毎月の例会の楽しいこと、近頃は正江様の実作の時間も加わり、ますます充実、余程の差しつかえの外は欠席することもなく続けております。その都度よいテキストと御講義、得るところが多く感激いたしております。連句の奥深さには、驚きの他ありません。健康の許すかぎり、ACC、猫藁会、沙羅の会等々に出席したいと思っております。人の世は、ほんの一瞬の旅人と思いますが、四捨五入すれば八十才となります今、ふり返りますと、この幸せは第一に、明雅先生を通じての連句との出会い。あとの二つは、誓子先生に親しく接し、この二十年間、毎年の海外旅行に連れて行っていただいたこと。

今一つは、同じ頃から入会しました日本文学風土学会で毎年二回、内容の濃い文学の旅の出来ること、などとなっております。これ等のことから考えますと、一人でも多くの方が、ACCの連句教室にお入りになることが、より大きい味わい深い幸せへの近道と信じられます。俳句人口が驚くほど多い昨今、全然宣伝されていない連句教室があふれる程になる日を願っております。

近頃、連句実作をなさる方は、どんどんふえておりますが、やはり式目が乱れておりましたりいたしますので、一度、連句の古今の事を教えていただき、式目もきっちり習いますと、その都度、新しい発見があり、生き甲斐につながるのではないでしょう。只連句教室は、少くとも二、三年位はおつづけになる方が良いと、経験上考えられます。余り短いと、楽しむところまで行かないのではないかと思われます。気の合った連衆と、一気に巻き上げる歌仙の座が一番面白いのですが、遠くにすむ友との文音などもポストに見付けた時から、なつかしく心楽しいものです。

一役員として

市野沢弘子

最近某所で歌仙を巻いた折、「みちのくは芭蕉ブームに沸き立てる」と言う山口みづゑ様の句を、時事の句として付けさせていただいた。その句の通り、今年は芭蕉の「おくの細道」の旅から、ちょうど三百年の年に当る。「おくの細道」関係の出版物も増え、各所では催物が行われ、さらには映像版も出現し、みちのくのみならず、日本中が芭蕉ブームに沸き立って居る。その様な記念すべき年に、芭蕉の流れを受け継ぐ者として、亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行に、参加出来たことを、この上なく誇らしく思っている。明雅先生は晴男。自称私も晴女。前日の狂った様な激しい雨が嘘の様に晴れ上り、清々しい神苑に、その日を迎えることが出来た。神殿に上り、神主の祝詞を聞きながら、今までにない不思議な新鮮さを覚えた。と同時に連句を学び始めてからの、十年近い年月が思い起されてならなかった。連句も俳句と同じく、擱んだかなと思うと、するりとぬけて行ってし

まい、何時になっても手の届かないもどかしさを、幾度感じたことか。しかし明雅先生の暖かい励ましと、諸先輩のやさしいお導きのおかげで、一役員として天満宮の神の前に居られる喜びをかみしめて居たのだった。そしてこれからも、芭蕉の説いた「風雅の誠」を追い求めながら、明雅先生の実践的教えを肝に銘じながら、さらに連句の道に精進して行くことを、密かに誓っていたのである。

今日においては、何事にもより早く、より簡単にと、追求され勝ちであるが、この日ばかりは時の流れが止ってしまった様な、そんな錯覚さえ覚える程であった。雅楽のバック・ミュージックに合せた、執筆役の秋元正江様の優雅な所作の一つ一つに、又台詞回しに、ただ酔い痴れて居た。そしてそう言う気持ちになることよって、芭蕉の教えに、どうか一歩位近づけた様に思えた。と同時に、形と心の相互関係の大切さを、改めて認識し直したのであった。淀みなく興行が進行する中で、連句は「座」の文学だけでなく、「和」の文学でもあるのではないかと、ふと思ったりしたのは、私一人だけだったでしょうか。尚、私にとり

ましては、上司でもある草間時彦先生を、お客様としてお迎えすることができ、更に有意義な一時を過ごすことが出来たのであった。まだ残って居る昂りの余韻を打ち破る様に、和服から洋服に着替えると、やっと平生の自分に居ることが出来た。もう一つ感想として書いておきたい事は、猫蓑の連衆の御参加がちよっと少なかった事である。それに比べて見学者の数が、予想以上に多く、席を整えるのに、少し慌てる程であった。しかし見学者即ち連衆予備軍と考えれば、連句の発展にとって、誠に心強い事であるとと思うのである。最後になってしまっただが、リハーサルも含めて、式田和子様には大変お世話になり、女性の役員を代表して、ここに厚くお礼申し上げたいと思うのである。

◆◆◆◆◆ 新刊紹介 ◆◆◆◆◆

株式会社電通の連句部は、昭和五十八年から毎月興行され、このほど、その作品を纏めた「電通連句第一集」が発刊された。すぐれたコピーライターを中心とする作品は流石に新しく、二十韻という新形式を弘めるに貢献する所大である。代表者104中央区築地一十一 電通連句部 吉田憲助

菘虫

付勝練習二十韻

東 明雅

切 締 句 投
日 20 月 7

六句目 制服ぬいだ彼とくつろぐ

七句目 さりげなくお守りだよと犬はりこ

八句目

治定 回教国は酒も御法度

1 藪を掘ったらお札ざくざく

2 車井戸汲む音の軽やか

3 お金で買へぬ国の宰相

4 開基遠忌に燻ゆる香煙

5 ぴっかぴか一の一年坊主

6 嵐氣遣ふ西の雲行

7 水天宮の御縁日今日

8 囚人体操すこしけだるげ

9 ぬっと顔出す山かげの湯屋

10 空くじなしの宝くじ買ふ

11 死ぬ覚悟して落ちる階段

12 人形町の古い町並

13 選挙運動出発の刻

14 大切にして磨く手鏡

15 産む人よりも親が心配

よしえ 元子

和久

よしえ

うせい

澄子

雅代

千雪

美鈴

美幸

あかり

鋭太郎

良子

昌子

遊

治子

妙子

和仁

※族を付けたものであろう。付心はよく分かるけれども、

何か表現がかたくてすっきりしていない。7の水天宮は安

産の神様である。だから、付心はよく分かるのであるが、

それだけに転じの点でいささか問題があり、この句も打越

から一続きになってしまふ恐れがある。8はまた物凄く転

じが利いている。それだけに付心は何であろうか。囚人体

操をしている一人が犬はりこを持っている。それを同じ囚

人の一人が、「それは何じゃ」とたずねたのに「いや、お

守りだよ」と答えている状態と見れば分からぬではない。

前句をやや見立替して付けたところなどおもしろく、流石

ベテランと言えるが、この句を採用したら、後の付句を案

じるのが大変であらう。9もおもしろい。山かげの湯屋と

いうのはおそらく温泉宿で、ここでぬっと顔を出したのは

男性であらう。女性が湯に入っているところに、ぬっと顔

を出して、犬はりこをさり気なく渡すという場面の設定で

あらう。その男性と女性の関係・人柄などを想像すれば、

またいろいろのイメージが湧いてくる。ただ、打越から一

続きの感は免れない。10空くじなしの宝くじというものが

あったら私も買いたいのであるが、それが前句と何で付い

ているのか。ちょっと理解し難かったが、前句と付句でジ

ョークを言っているのではないかと考えた。それならそれ

でおもしろいと思うけれども、それにしてもすこし難解で

ある。11この句もちょっと見た時、何のことだろうと考え

たが、つかこうへいの戯曲「蒲田行進曲」で大根役者銀ち

ゃんの「階段落ち」のシーンから来ているという説明を読

むかし、花咲翁さんが裏の畑を掘ったら、大判小判がごくごく出て来たという。近頃は川崎市の竹藪から二億円余りの札束が出て、新聞やテレビを賑わした。1はこの二つを結びつけ一句としてはおもしろいし、時局の句でもあろうが、前句との付心はどうであらうか。あるいは前句の犬はりこから、花咲翁さんの愛犬ボチを想像されての付心かとも思うが、両句の気分が全く異っているので、付味もしっくりしない。2は1と違って大したことは言っていないが、前句のさりげなくが音の軽やかという表現にひびいて、よい付味である。ただ、それだけに打越から何か一つづきのような感がしないでもない。3も時局の句で大きく転じたところはよいが、やはり付味が今一步である。4は犬はりこを買った場所、いわゆる其場の付けとして見ると付心はよく分かるし、付味も悪くない。ことにこの作品には今まで恋の外にはあまり目立った題材が登場していないので、ここで釈教の句を出そうとされたのであろう。そうした配慮も必要なのである。5は前句のお守りを受ける相手が子供であるとされたところはおもしろい。しかし、一年坊主は例の下七の四三で語呂が悪いとともに、ぴかぴかの一年生はおそらく新入生であるから、春の季節が否定できない。ここに春の句を出すことは無理である。6は前句を飛行機か船で旅をする人と見定め、雲行を心配する家※

んでやや納得した。実は私は「浦田行進曲」を読んでもいないし、映画で見てもいない。ただ、説明を受ければその場面を想像することは可能である。12は水天宮のある人形町の叙景句で、これなど付心もよく分かり、打越からの転じも十分である。無難な句なのでこの句を治定しようかとも考えたのであるが、一巡の關係でできなかった。13も付心はよく分かり、転じも十分である。この句は自の句とも考えられるが、打越は自他半なので差支えはない。14は犬はりこを貰った女性その人の付けである。やさしい夫に対して、きちんとした妻、手鏡を磨くというところに人柄があらわれている。尤も鏡は恋の句になるが、このところ前二句が恋の句ながら、恋の情は淡かったため、もう一句恋を続けても差支えないところであった。15もお産の句だから恋の句である。犬はりこが安産のお守りということを真正面から受けて、ややベタ付けの感がないではない。16はまた、とびきり離れている。典型的な遁句で其場の付け。さて、治定の句「酒も飲めない中近東の回教国へ仕事で行っていた男が、久しぶりに我が家に帰って来て、どこぞで求めた犬はりこをお守りだよと妻に渡している」という説明があり、これでも付心は分かるし、おもしろいのであるが、私はむしろ、これからその中近東へ出かける息子が妻の身を案じて、お守りを渡している景と見立替えた方がおもしろいのではないかと思う。ともかく、外国に舞台が移ったのであるから、次は人情自他半以外なら何でもよい。雑でお願いしたい。

◆柏連句会

七日けふ 東 明雅 捌

「七日けふ」の記

山田和久

七日けふ昭和も遂にお別れか 明雅

御行ばかりの粥の煮えたつ 正江

缶蹴りの子供らの声響き来て 美津

運動会に渡すお土産 和久

薄月のはやかかりたり山の端に 津

いきな男のかもす葡萄酒 江

ハーレムの太守の夢のアラベスク 久

蟻には蟻の天国があり 雅

病床で六法全書学びつつ 江

B・G・Mをイヤホンで聞く 津

巖頭にくだけは散る瀟がしら 江

結跏趺坐する修行上人 久

しびれ来てつってしまひぬつちふます 江

心中なんてもう無理な輪 久

ヴィヴィアンリー・アンナカレニナ冬の月 江

オリエント急行ひた走りゆく 津

三毛猫を名探偵に仕立てあげ 久

不精髭ぬくうららうららと 津

花舞台よういやさあとと扶もち 江

春風そよと隅田川の面 久

平成元年一月八日

於 南柏 光ヶ丘近隣センター

地平らにして天成る、内平らにして外成る、平成元年の第一日目、一月八日は柏連句会の初懐紙の日でした。昭和天皇崩御の翌日のこととて、もしかしたら今日の句会は無いかも知れないと、勝手分らぬ初参加の取越苦労も、「お待ちしています」との明雅先生の奥様の電話に安堵し、川崎の奥から多摩川を越え、小田急、千代田、常磐線へと乗り継いで、光ヶ丘近隣センターの客となりました。

記念すべき平成元年初日の連句会、席は三席、明雅先生の席に配され、いささかの緊張感のうちに

七日けふ昭和も遂にお別れか 明雅

この日にふさわしい明雅先生の発句で二十韻が始まりました。

脇句、第三と付け進み、いつしか取り残された一巡の殿、何とか早く付けねばと、心はやはり気はあせり、頭の中は真っ白け、「何でも良いから出して下さい」という先生の声も上の空。式目なんぞは物の見事に

ふっ飛んで、おぞおす差し出す短冊を、「はい、ほうほう」と御覧になり、「こんな風にしたらどうでしょうか」とさりげなく直されて、なるほどなるほどと得心し、やっと一巡を果したうれしさに、目の前のお菓子にそっと手を出す初心者の辛さ。

これでも進歩した方で、以前にも一巡の最終ランナーで苦しみ、捌きや連衆の助けで何とか付け終って、「さあ、これで責任を果したのですから、どうぞお菓子でもお上りなさい」と言われて、あら、恥かし、句は付けずにお菓子はとくにいただいていたのであります。

この席は事実上の三吟で、片ときも息を抜くこと許されず、今は序破急のどの辺か、山も谷も五里霧中と思う内に一巻の首尾となりました。

句会の後の蕎麦屋にて「三毛猫はうまく付けましたね」とのお誉めの言葉に、噴出する汗をなべ焼うどんのせいにしながらも、柏通いが癖になりそうなる予感がしました。

久

江

津

久

津

久

津

江

久

江

久

江

◆四宮連句会

春の障子 坂本孝子 捌

雨の音やさしき春の障子かな 孝子

ほつほつと湯のたぎる釣釜 和子

桜貝ひろひし砂の乾きゐて 洋子

追ひかけっこで転ぶ弟 遊

先生も夜店ひやかす町の月 好敏

朝ぢやないのにお早うと言ひ 遊

鏡さへ瞞しおはせて老化粧 和

伴が葬る父の愛妾 美奈子

冬苺マイセン白磁に盛られけり 敏

碧落の鷹軌跡乱れず 和

超高層仰ぐ姿は弓なりに 遊

あつかましさを凝りて代議士 和

見たい見せたいルノアールの肌 奈

大小の並びし鍋に月がさし 遊

犬と語らふうそ寒の酒 孝

秋深き母のバイブル手ずれして 遊

野面ゆたかにわたりゆく鐘 奈

花霞山ふところに風生まれ 洋

虹や蜜蜂まとふ故郷 敏

平成元年三月二十七日

於 四宮集会所

四宮だより

坂本孝子

四宮の連句会は、毎月何故か降られる事が多い。この日も、夕方からこぼれはじめた雨がとうとう本降りとなり、障子の外に快い調べを奏でていた。

第三 桜貝ひろひし砂の乾きゐて 洋子

洋子さんは、連句をはじめられてからまだ日も浅く、ここ四宮で数回お目にかかった

だけなのに、こんな素晴らしい第三を付けて下さり、心強い限りである。

六、七、の付けは芸能界であろうか。押しも押されもしない名女優が登場したところへ美奈子さんが駆けつけて

八 伴が葬る父の愛妾 美奈子

彼女は、四宮へは初めてで、雨の中、道に迷いながらやっと到着、弾む息で佳吟をものされ、一同改めて歓迎の意を表したので

ある。

九、の華麗な中に抑制の効いた美しさから大きく転じた大空の鳥は、「鷲の円」ではなく「碧落の鷹の軌跡」でこそ、くつきりと響き合ったのだと思う。

一一、の句、私事ながら、朝日カルチャーセンターに通い始めた頃の私はまさに、こんな姿で西新宿の街頭に佇んだものだと思います、懐かしい。

一三、一四、の恋は名残の表らしくユーモアがあり、しかも一四、は若い恋人のひたむきな心理が表現されていて好ましい。

以下は次第に穏やかに巻き終わり、所要時間は三時間足らず。終盤はやや急いだが、二十句が皆転じ、付け味、付け心よく、気持ち良く巻き上がったように思う。

いつも会場のお世話をして下さいる和子さん、土砂ぶりの夜更けまでお付き合ひ下さった連衆の皆様、有難うございました。

◆逗子連句会

咲く花

本屋良子 捌

逗子連句会について

本屋良子

咲く花も散る花もあり妻籠宿

良子

谷間を渡る鶯の声

杉亭

採りたての蛭烏賊など盛り付けて

満子

幼稚園児の脱ぎしゴム靴

八重子

菖蒲湯につかりて父と月仰ぐ

好敏

悦に入りては弾む冷酒

亭

いつまでも人にあかさぬ胸の内

重

思ひ遂げたる順と俊子と

亭

道祖神夕日を浴びてひそと佇つ

満

絶対多数いま四面楚歌

敏

一円のアルミ貨眺め懐手

重

チンチラコート身にまとふ女

亭

相性を占ってみる羅府の巻

敏

心変わりを嘆く秋天

良

月昇り砂丘の砂のしろじろと

重

叢の中ひそむ馬追

満

棺かこむ小唄の弟子は婆ばかり

敏

家包に買ふ中華饅頭

良

抱一の軸に描きし紅枝垂

亭

紙燭の炎揺らす春風

満

平成元年四月十四日

於 本屋宅

文学におよそ縁遠い私たちが、式田さんのお誘いで、東先生門下となって連句を始め、先生に手取り足取りご指導いただいた、三年余になります。

四月十日妻籠宿を訪れました時は、早咲きの桜は散り始め、片や、咲く桜もあり、季節はめまぐるしく変わりつつありました。

脇の杉亭さんが、山間にある妻籠宿に鳴く鶯の声をつけて下さり、その声を聞きつつ、逗子では相模湾で採れた蛭烏賊の刺身を盛りつけている風景に変化していきます。山から海へ、見事に転じていただきました。山裏の恋は、川田順と鈴鹿俊子の老いらくの恋で、珍しい恋ができました。それを道祖神がひそと見つめています。

さて、竹下内閣は今や、最悪の状態です、それを史記の故事になぞらえ、四面楚歌とは、云い得て妙としか云い様がありません。それにつけても消費税導入以来、やたらと、たまる一円玉を眺めつつ、軽い宰相のこと、

軽い世相のことなど想う折立の句は、何と含畜のある句ではありませんか。名残の表の恋は、ガラリと変化しまして、ロスアンゼルス街裏でチンチラコートの女との相性を占って貰うのですが、占いの甲斐なく、見事振られてしまいます。立句に花の句が出ましたので、花の定座は、花の字抜きで、抱一描く所の、紅枝垂の軸を出していただきました。その軸の掛っている床の間に春風がそよと紙燭の炎を揺らす絵の様な風景で一卷が終りました。杉亭さん、好敏さん始め皆様の手助けなしでは出来ない芸当ですが、二十の句が連った一卷を読み返し、三時間で、かくも素晴らしい作品が出来ました事を本当に嬉しく思いました。根気良くご指導いただいております先生には感謝の気持ちで一杯でございます。

なお、逗子教室も私邸では、手狭になり、五月より鎌倉駅前、お産女さまの社務所に、場所を移すことになりました。

◆逗子連句会

花 霞

加藤道子 捌

座 芸

式田和子

伊豆の海沖の小島も花霞

汐風うらら静かなる波

炬塞ぎに居ずまひ正す客とゐて

巡業の櫓太鼓は月の下

はらうてくれし残り蚊が縁

そぞろ寒着瘦せのたちと知られたる

ニャンピタン飲むグルメ猫なり

リビアなる砂漠の砂の代赭色

「悪魔の詩」で撃たるるは誰

鷹匠オホの腕に鷹は鈴鳴らし

亭主の留守に畳替する

やっちゃ場の嫁は早寝で子沢山

陶枕にまだ夢を見る月

夏山にハーケン打ちてザイル巻き

老母が守る辻の石仏

それぞれの越し方のよし友集ふ

紙風船で出るわらべ唄

枝垂れたるひととも桜照り映えて

螢鳥賊喰ひ満尾乾杯

平成元年四月十四日

於 本屋宅

道子 弘次 知佐 和子 淑子 和 淑 道 次 佐 淑 和 同 佐 次 淑 佐 次 和

連句は「座の文学」といわれます。
捌きは、この座を盛り上げて、良い句を
引き出し、一卷を首尾させるのですから、
ひとつの座芸ともいえますよ。

連句を学ばれるとき、「主婦だから」と、
出句の幅の狭いのを嘆かれますが、主婦で
もひとりひとりが今まで過して来た人生の
軌跡がある筈ですし、その中に自分の得意
な分野がある筈と私は思っていますので、
忘れていたことを思い出すよう、また日常
のなにげないことが、人の息づかいの聞え
るような良いやり句になることなど、ちょ
いちょい申します。逗子の席は仲の良いお
友達が集っておられるので、構えず自然な
日常の生活が出るところが良い一卷に繋が
るのではないかと思います。

時しも花の候。お茶のお客から子供とは
さんで相撲に転じ、着痩せの恋句から、ふ
わふわの毛の猫も抱いてみると案外瘦せて
いて、こういう猫はグルメでリッチでしょ
うから、その砂箱の砂はもしかしたら、席
主の本屋良子さんのエジプト土産の代赭色
の砂のような輸入物かもしれません。外国

へ出たところで、聖書にくだしい知佐さん
に、話題の書「悪魔の詩」についての解釈
も伺えました。

ナオに入って鷹が睨む荒野の広々とした
景に、和子はみみっちい日常を付けました
が、次の陶枕でぐっと上品に。その夢を恋
から登山の若人の姿に転じ、息子の無事は
淑子さんがちゃんと祈ってくださいました。
それぞれの越し方のよし友集ふ 知佐

この座の総括というような句が付きまし
たが、もうちょっと遊びましようよと淑子
さんが紙風船を付けられ、連衆の脳裏には
それぞれの故郷の童唄がふっとよぎったこ
とでしょう。

当日は小坪の浜にあがった珍らしい生の
螢鳥賊が出まして、弘次さんはこれをラッ
キョウで釣ったことがある由。ラッキョウ
にびったり喰いつく螢鳥賊を想像するとな
んともユーモラスで、ごめんなさいと喉を
通らせ、このおいしさとお酒を和子のため
に挙句に残してくださいました。

もう一度、乾杯！

◆電通連句部

春 燈

東 明雅捌

もう五年、まだ五年

青木 秀樹

春燈ひさかたぶりの季寄せかな

美恵 秀樹

電通連句部はその名が示すように、広告

薫る夜の梅月の縁側

特製ワントンけふは売切れ

冷酒を飲みてニユースの文字を追ふ

風呂場で流す一日の汗

衿あしを白く粧ひ左棲

取締り役彼はヒモとか

思草薄の原にひっそりと

多摩の御陵に秋惜しみつつ

ハロイーン真赤な月に誘はれて

こぶしのきいた演歌三曲

愛犬はいつも寒さう首かしげ

ヒッチハイクで軽く駆け落ち

イベント学院何を教へてゐるのやら

留守番電話に小咄が出る

格別に楽しいことはないけれど

岬めぐりは船で往復

天上大風して棧橋は花吹雪

千羽の鶴が青空を引く

平成元年二月十六日

於 電通南寮

碧 雅 樹 茂 篤 碧 助 樹 助 恵 同 子 明雅 英子 茂 憲助 碧 篤

会社電通の社内結社である。昭和五十八年十一月に誕生、明雅先生には大病ご回復の直後からご指導いただいている。尺八の名取りである吉田憲助を中心に、コピーライター達が連句らしきものに取組んだのは、その一年ほど前であった。何事にも本格を志向する連中が、明雅先生の下に飛び込んだのは必然であり、お願いを聞き届けていただけなのは幸運であった。

会の記録をみると、五年間での参加者は「見学」と称する者を含めて延べ二十八名。二十代から五十代までの広がりがある。会の多数派を占めるコピーライターは、商品の良さを正しくかつ魅力的に消費者に伝える広告づくりのプロ、「言葉」をあやつる職人と言える。その彼らが連句では苦戦をしている。変化を旨とする連句の世界では雑多な知識と多様な経験の面で、年の功が物を言うように思われる。

ゴルフでは「プロには得意なクラブがあ

ってはいけない。アマチュアは得意なクラブがあった方がよい」という言葉があるそうだ。その点からみると、私たちは立派なアマチュア集団である。温かい叙景句と濃厚な恋句に才のある者、焼跡派恋句を得意とする者、華麗な恋句に自信を持つ者、ロマンチックな叙情に生きる者、江戸情緒に浸る者、教養派で電話の句が好きなる者、骨太の時事句に力を発揮する者、ヤングの流行を素早く取り入れる者、雑の短句で元気になる者などが主な連衆である。

こんな私たちが、毎月の例会の作品を恐れも知らずに「電通連句」のタイトルで一冊の本にまとめてしまった。昭和五十八年十二月から六十三年十二月までの、歌仙十卷、半歌仙二卷、二十韻五十二卷を収めた。文台引き下した反故とはいえ、私たちの連句昭和史となる。人それぞれに「もう五年、まだ五年」の感慨を禁じえない。すべては明雅先生をはじめ、徒司、東夷、正江の諸先生方のご指導の賜である。

連句会案内

※連句教室

日時 第一日曜日 午後一時〜五時
会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ一ノ三

(電) 九四一―一四四五

※柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時〜五時
会場 光ヶ丘近隣センター
(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マーケット下車)

※A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四水曜 午後一時〜三時
会場 新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター
(電) 三四四―一九四二(代表)

※猫婁会(会員制)年四回

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
会場 松声閣
文京区新江戸川公園内
(電) 九四一―九六四九

△御注意▽

柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、昨年六月から第二日曜に変更致しました。(八月は休み)

雁帛往来

▽A・C・Cでは恒例により三月、次の方々に蕉風伊勢派の伝道書が贈られた。

梅田利子・小川弥生・下坂元子

下鉢清子・瀧川雅代・八角澄子

山崎一恵・若尾よしえ

▽四月三日、名古屋の加藤耕子さんらの招きで、猫婁会主宰ならびに有志は、桜花満開の熱田神宮で熱田万句三百五十年記念の俳諧を興行し、歌仙一卷を奉納した。これには岐阜の国島十雨宗匠、豊田の矢崎藍さんとそのグループ、西尾の斉藤吾朗画伯なども参加され、盛会であった。

▽四月九日、正式俳諧の総稽古が柏市光ヶ丘近隣センターで行なわれた。当日は役員の方全員出席、熱心な稽古をした。

▽四月二十五日、猫婁会は亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧を午後一時より興行した。前日までの雨もからりと晴れ、藤も真盛りの好条件に恵まれ、知司福井隆秀氏の司会、執筆の秋元正江さんは本邦初演の女性執筆であったが、端麗な容姿と举措とで、詰めかけた観客を魅了し、大成功であった。そ

のあと九席に分かれ、二十韻を興行した。この行事にあたって、いろいろ御配慮をいただいた宮司大鳥居武司氏・彌宜木村恒雄氏・権禰宜田中正博氏ほか天神社関係の方々に厚くお礼を申し上げる。

▽季刊連句二十五号は、原稿締切が猫婁会直後のこととて、時間的余裕がなく、皆様に御迷惑をおかけしたが、全員協力され、一篇の遅れもなく無事まとめることができた。大変ありがたく感謝する次第である。

季刊「連句」第二十五号

平成元年六月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所

▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ二 東方

電話 〇四七二(七五)二一九二

振替口座 東京七―一五二二三三

印刷所 尙岩田印刷所

▽277 柏市豊住一ノ一ノ二二

電話 〇四七二(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に

版
B6判

三
三五〇〇円

必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思ひなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋

鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円

俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円

現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとられず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円

季語辞典

日本の季節にまつわる言葉をストック・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円

難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 国語学会編
B5 7,000円

国語慣用句大辞典 B5 白石大二編
A5 8,000円

国語史辞典 B5 林巨樹他編
B5 5,000円

日本語語源辞典 B5 堀井幸以知編
B5 8,000円

京都語辞典 B5 井之口・堀井編
B5 1,000円

擬音語擬態語辞典 B5 天沼・車編
B5 3,000円

隠語辞典 B5 椋塚・美実編
B5 2,000円

近世上方語辞典 A5 前田・勇編
A5 1,000円

花柳風俗語辞典 B5 藤井泰哲編
B5 2,000円

明治新語俗語辞典 B5 堀島忠夫他編
B5 6,000円

難訓辞典 B5 中山泰昌編
B5 3,000円

名乗辞典 B5 荒木道雄編
B5 1,000円

名数数詞辞典 B5 森・隆彦編
B5 5,000円

あいさつ語辞典 B5 奥山益期編
B5 2,000円

新版 ことば遊び辞典 B5 鈴木素三編
B5 5,800円

類語辞典 B5 鈴木・広田編
B5 6,000円

類義語辞典 B5 徳川・宮島編
B5 7,000円

表現類語辞典 B5 藤原亨一他編
B5 4,000円

新版 文章表現辞典 B5 神島・村松編
B5 6,000円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-233-3741~2